

〔研究ノート〕

近代日本の新婚旅行 —その解明の基礎研究—

今井重男

1. 緒言：論攷のきっかけと論点
2. 昭和初期の新婚旅行：伊勢・二見浦に関する一考
3. 坂本龍馬の新婚旅行
 - 3.1 書簡と『竜馬がゆく』に読む新婚旅行
 - 3.2 龍馬研究資料からの検証と1つの結論
4. 近代の新婚旅行攷
 - 4.1 新婚旅行の訳出：明治時代①
 - 4.2 新婚旅行の紹介：明治時代②
 - 4.3 新婚旅行の普及：大正時代
 - 4.4 新婚旅行の心得：昭和時代
5. 結言：論攷結果と課題

1. 緒言：論攷のきっかけと論点

旅行には様々な形態があることに異論はないだろう。両親と子どもがワイワイと楽しく行く家族旅行、幼稚園や小学校の遠足、中学校・高等学校の修学旅行や大学の卒業旅行、交際する2人で行く婚前旅行や結婚後の新婚旅行…、生まれてから死ぬまでの一生が長途の旅であるといった考えも含めれば、その種類は枚挙に暇がない。このように多種多様に存在する中で、われわれが本稿で取りあげるのはハネムーン、つまり新婚旅行である。

そもそも結婚というものは考えれば考えるほど不思議な通過儀礼である。お互いが惹かれ、心底愛し合うとはいえ、それまで全く別の環境、家族の中で生きてきた2人が、ある瞬間を境に共同生活を開始するのである。そして新婚旅行は、その第一歩として、2人が「甘い旅程・演出」のもと、比較的豪華な旅行に発つのであり、生涯の思い出として長く記憶に残るのは当然であろう。もっとも、こうした考えは婚前旅行、あるいは同棲経験のない者の思いであり、今日のように結婚前の同居割合（同棲経験率）が高くなる⁽¹⁾と、そうした新婚夫婦の旅行はセレモニーとしての色彩が濃くなろう。とはいえ、新婚旅行という語から連想されるのは、新婚夫婦が喜びに打ち奮え胸はずませる姿であり、こうした前提で議論を進めていく。

(1) たとえば、ブライダル産業を展開するアニヴェルセルの調査(2016年実施)によれば、結婚前に「同棲・半同棲していた」カップルは全体の48.5%を占めると発表されている。詳しくは <http://www.anniversaire.co.jp> 参照のこと。

本稿を著したいと考えたきっかけは、①祖父母の新婚旅行写真を発見したこと、②坂本龍馬が妻と向かった鹿児島行が「わが国最初の新婚旅行」である、という性質の異なる2つの、しかし新婚旅行という共通ワードについて気にかかったからである。前者は、昭和初期の日本では、新婚旅行が普及していたのだろうか、行き先はどんな理由でどこを選んだのであろうかといった旅行需要側と、受け入れる旅行地の種類と特性あるいは政策や動向などの供給側の、双方の関心を刺激する。また後者は、新婚旅行の歴史をどうみるか、さらにはわが国におけるその発生の原点などの研究を深化させる萌芽となることが想像される。しかし、本稿では新婚旅行に関わる理論的な考察は次稿に譲り、その前段として資料の博搜を優先させている。主にこれらの理由を議論の起点とし、わが国ではいつ頃からのような経緯で新婚旅行が定着していったのか、明治から太平洋戦争終戦まで近代に時代を限定して文献整理し、新婚旅行というブライダル習俗解明の基礎研究を行う。

本稿の構成は次のようになる。この後の2章で、昭和初期に祖父母が訪ねた二見浦を例に、当時の観光地での新婚旅行の様相を考察する。続く3章は坂本龍馬が妻お龍を同伴した鹿児島行が、どのような理由で「わが国初の新婚旅行」といわれるのか関連書籍をひも解き検証したのち、4章では明治以降の近代について、新婚旅行の訳出に触れながら、その紹介、普及、心得を中心に論ずる。最後の5章で論攷結果を振り返るとともに今後の研究課題と方針について簡単に述べる。

2. 昭和初期の新婚旅行：伊勢・二見浦に関する一考

図1の写真は昭和初期の新婚旅行の写真である。撮影場所は三重県二見町（現伊勢市）・二見浦にある名勝「夫婦岩」で、前に立つ男女は祖父・山内藤造（25歳）と祖母・志津（20歳）である。この論攷を開始する1つの理由は、前述の通りこの祖父母の1927（昭和2）年の新婚旅行写真を見て、当時の二見浦が新婚旅行の地として認知されていたのか、また同地は新婚旅行先として人気があったのか知りたいと思ったことである。

祖父母が新婚旅行で訪れた二見浦は、伊勢神宮内宮の御手洗場を流れる五十鈴川の下流域に広がる三角洲の総称で、東は立石崎、西は今一色高城浜に至る蜿蜒5kmの長汀曲浦である。眼前の伊勢湾を隔てて知多および渥美半島を望み、沿岸には日本最古の海水浴場⁽²⁾も擁する。図1の祖父母の後背に写るのは「夫婦岩」である。立石崎の先120mの海中に大小二基からなる岩で、明治以降これを夫婦岩と呼称し、それ以前は「立石」と呼んでいた⁽³⁾。またこの岩は沖合650mの海底に鎮座する輿玉神石（猿田彦大伸ゆかりの靈石）に対し鳥居の役目を果たしている。

ところでこの二見浦は、昭和初期に新婚旅行客を誘致する諸活動を行っていたのだろう

- (2) 二見浦は古来、伊勢神宮を詣でる者が、事前に心身を清めるために海水に身を浸した場所であった。ここに海水浴場が設けられたのは、1882（明治15）年に政府の衛生局長を務める長与専斎がこの地を来遊し称賛したことに起因する。これを受けてわが国初の海水浴場が開かれた。その後、日露戦争傷病兵の療養先として指定され、これが旅館街形成を促した（二見町,2006:108）。
- (3) 正式には、大岩を立石（9m）、小岩を根尻岩（4m）と呼び、二岩は5連の大注連縄（35m）で結ばれる。この注連縄は「結界の縄」を意味し、すなわち向こう側が「常世神（とこよのかみ）」が住む聖地であり、手前が俗世である。また、この両岩間の旭日昇天を拝すことを「二見浦の日の出」と呼び伊勢神宮参詣者に名高い（森田他,1990:51, 二見町,2006:10）。

図1 新婚旅行記念写真：伊勢・二見浦「夫婦岩」(1927年)



か。二見浦のある二見町に関する複数の資料を読み、役所・図書館・歴史資料館などの行政機関に問い、さらに現地を訪ねる視察旅行も実施したが、そうした形跡を発見するには至らなかった。貴賓の宿泊所として同地に建設され、現在は歴史建造物・資料館として開放する「賓日館」の協力を受け保有資料の閲覧もしたが、それらしき文献は見つけられなかった。同館が保有する大正から昭和初期の数冊の宿帳に、高級軍人や大学教授などの学者、企業の重役の名が多く記されていることが分かった。しかし、その役職から考えて、それらの客が新婚旅行として宿泊したとは考え難い。ひょっとすると祖父母の名も読めるかもしれない、と相当丁寧に資料を探したが見ることはなかった。他方で、こうした階層の人々の名前に交じって東京や関西、東海地区の私立学校名も読め、戦後の二見浦がそうであるように修学旅行の誘致例は多数確認できた。地元出身の同館の職員から聞いた話によれば、市街地から適度に離れ(徒歩では行くことができない距離)、少人数から団体まで対応できる様々な旅館が並び、しかも娯楽の酒色に疎い二見浦は、修学旅行の宿泊先として人気であったという。

以上を踏まえ、祖父母が新婚旅行地としてここを選んだ理由は、当時(1927年)から二見浦が一級保養地として全国的に認められていたことではないか、と推察したい。観光地として二見浦が脚光を浴びたのは、明治半ばに英照皇太后(明治天皇の嫡母)や皇太子嘉仁親王(後の大正天皇)が長期逗留したことに起因する。これを機に、明治後期から大正、昭和初期にかけて交通機関の発達や電気や電話開通などの社会インフラ整備が進んだ。し

かも、旅行の翌年には、「空前絶後」の規模の第58回式年遷宮を控えており（岩中他,1992：80）、伊勢神宮と合わせて二見浦の文字を目にすることも多かった可能性もあろう。すなわち、「夫婦岩」という新婚夫婦の新生活開始を誓うに適当な名の景勝があり、華やかさや騒がしさを好まず、娯楽を酒色に求めることのない2人は、旅行先にわが国有数の観光地として広く知れ渡るこの場所を選んだ、という推論である。

二見町は2005年、いわゆる平成の大合併で近隣の小俣町、御菌村とともに新制伊勢市に衣替えした。現地へ赴き以前の二見町時代の史料、合併後の伊勢市史料はもちろん、この地域全般の各種観光資料が多く存在することが分かったが、本稿を執筆する段階では、これら資（史）料に二見浦の新婚旅行振興に関する記述は発見できていない。引き続き関心を弱めず文献渉猟に努力する考えである。

3. 坂本龍馬の新婚旅行

3.1 書簡と『龍馬がゆく』から読む新婚旅行

本章では、当論攷を誘起した理由の1つである、わが国最初の新婚旅行が坂本龍馬の鹿兒島行であったとする説について、書簡と各種関連書籍などから検証し、そうした謂れ因縁を明らかにする。

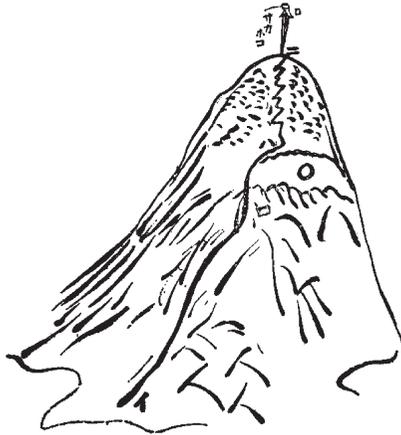
長崎に滞在する坂本龍馬が、1866（慶応2）年12月4日に姉・乙女へ書き送った書簡が現存する。国の重要文化財の指定を受け、京都国立博物館が所蔵のこの書簡には、龍馬が妻（お龍）を得たこと、霧島温泉や塩浸温泉を訪れたこと、お龍とともに高千穂峰を登山したことなどが記されている。書簡に認められた旅行に関する記述の（一部）では、

（略）霧島山（キリシマヤマ）の方へ行道にて日当山（ヒナタヤマ）の温泉（泊）に止まり、又しおひたしと云温泉に行。此所ハもお大隅の国にて和氣清麻呂（庵）がいおりおむすびし所、蔭見の滝其滝の布ハ五十間も落て、中程にハ少しもさわりなし。実此世の外かとおもわれ候ほどのめづらしき所ナリ。此所に十日斗も止りあそび谷川の流にてうおゝつり、短筒（ピストラル）をもちて鳥をうちなど、まことにおもしろかりし。是より又山上ニのほり、あまのさかほこ（天の逆鉾）を見んとて、妻と兩人づれにてはるばるのほりしニ、立花氏（橘南翁）の西遊記ほどニはなけれども、どふも道ひどく、女の足ニハむつかしかりけれども、とふとふ馬のせこへまでよぢのほり、此所にひとやすみして、又ははるばるとのほり、ついにいたゞき（アマ）にのほり、かの天のさかほこを見たり。其形ハ是はたしかに天狗の面ナリ。両方ニ其顔がつくり付けてあるからかね也。やれやれとこしおたゝいて、はるばるのほりしニ、かよふなるおもいもよらぬ天狗の面（げにおかしきかをつきにて）があり、大ニ二人りが笑たり。⁽⁴⁾

(4) 書簡は宮地(1982)を転記した。()付のルビと補説は同書の記述を用いているが、()の無いルビは原文(書簡)のままである。書簡中に記述のある「和氣清麻呂がいおり(庵)おむすびし所」とは、奈良時代の769(神護景雲3)年9月に称徳天皇により大隅へ配流された(いわゆる「宇佐八幡宮神託事件」)で和氣清麻呂が居を構えた地で、龍馬が訪れた時は島津齊彬の命による松が植えられていた。和氣公は奈良時代にわが国の皇統を憂いた人物といわれている。訪薩直前の1866(慶応2)年1月22日に成立した薩長同盟による日本の新しい姿と行く末とを重ね案じたことが関係している、というのは勘繰り過ぎだろうか。また、「蔭見の滝」とあるの

と、新婚早々の愉悦からか、のびのびかつ開けっ放しに詳報している。しかも、図2にあるような霧島山の画まで書き送った。では、そもそもどのような理由で、龍馬は新妻を帯同したこの旅に出たのであろうか。龍馬は1866（慶応2）年1月、逗留していた伏見の寺田屋で幕吏の襲撃を受ける。応戦した際、左手親指に深手の刀傷を負ったものの、同じ伏見にあった薩摩藩邸に逃げ九死に一生を得る。この藩邸でしばらく静養したが、その時に献身的に看護したのがお龍で、この事件をきっかけに仲が深まり結婚した。結婚後、小松帯刀、西郷隆盛、吉井友実の誘いで2人は鹿児島へ旅に出ることとなる。

図2 龍馬が書簡に描いた霧島山画



旅の目的の第一は事件のほとぼりを冷ますため、第二は刀傷を癒すためであった。新妻を伴った旅行となった理由は、お龍が同行を望んだためらしい（坂崎,2003：183）。他方で、龍馬とお龍が結婚後の旅行を楽しんだことから、この旅行をして「日本で初めての新婚旅行」と説明されることがある。たとえば、霧島温泉のある鹿児島県霧島市役所のホームページには「龍馬・お龍日本最初の新婚旅行地霧島市」として、「1 龍馬・お龍 新婚旅行の足跡」において、1866（慶応2）年3月4日「薩船・三邦丸に乗船。小松、西郷、桂久武、吉井幸輔等と鹿児島に向かう。中岡慎太郎、三吉慎三も同道。縁結びのこの旅が日本人の新婚旅行第1号となる」⁽⁵⁾と明記されている。

は、正しくは「犬飼（いぬかい）の滝」で、地元民との会話から聞き取ったのを「インケンノタキ」と当て字にして記したものと思われる。この滝を龍馬は「五十間」（約91m）と説明しているが実際は36mである。壮観な姿は50間にも匹敵する迫力に感じられたのであろうか。「立花氏」は、江戸時代後期の京の儒医である橘南谿のことで、日本の諸地方を訪れ現地で見聞した奇事異聞を紀行文にまとめた。『西遊記』は、南谿が1782（天明2）年西日本を周遊し、1795（寛政7）年3月に上梓された。旅行中、薩摩藩領に半年近く滞在し、同地滞在中に高千穂峰を登頂したのをはじめ、薩隅日3国（薩摩、大隅、日向）の各地を巡遊したことが綴られる。薩摩藩は、長らく他国者の進入を規制していたため、『西遊記』は同地の習俗や自然環境を国外へ知らしめる読み物としても有効な紀行であった。

(5) 塩浸温泉は2010年に塩浸温泉龍馬公園が整備された。龍馬が湯治したと伝えられる日帰り温泉施設や、坂本龍馬とお龍の旅行当時を回想する展示物、龍馬と霧島・薩摩の関わりを説明する資料館、新婚湯治碑、公園内

また、龍馬に関する著作類の中で最も有名な書籍といえるであろう『竜馬がゆく』において、このくだりを司馬遼太郎は次のように書いた。

幕府の追及がはげしいのをいわば「天意」とみて、薩摩の山奥にみをかくさしめるほうがよいのではないか。

一方、竜馬は別のことを考えていた。

新婚旅行

である。この男は、勝⁽⁶⁾からそういう西洋風俗があるのをきいている。いっそのこと、風雲をよそに、鹿児島、霧島、高千穂と、おりょうを連れて新婚旅行にまわるのも一興ではないか。

そうきめた。

早速、おりょうを呼び、そのことを宣言した。なあ、おりょうよ、竜馬はくすぐったくそういうのである。

「縁結びの物見遊山だぜ」

この風俗の日本での皮切りは、この男であったとあっていい。(司馬,1972:108)

司馬は、「新婚旅行」という語を用いて、「この風俗の日本での皮切りは、この男であったとあっていい」と表現している。しかし、「新婚旅行」という訳語は明治時代の新語と思われる(4章1項に後述)ことから、この言葉を発したとするのは読み物としての創作であろう。他方、「この風俗の日本での皮切り」との記述は、それを正解とする資料が存在するのだろうか。実は今から17年前、2000年に行った自身の新婚旅行は、この話に惹かれ鹿児島を訪問している。研究活動に従事する前の会社勤め時代に、混雑する通勤電車の中で『竜馬がゆく』を読みこれを知り、何の疑いもなく触発され鹿児島を新婚旅行の地を選んだ。われわれが信じたこの真偽について、引き続き論攷を進めていこう。

3.2 龍馬研究資料からの検証と1つの結論

坂本龍馬に関する著作類は、いったいどれほどあるだろう。伝記、小説、戯曲の類まで含めると相当数に上ることは想像に難くない。龍馬研究の根本史料となることを目的に企画編集された『坂本龍馬全集』の編述者宮地佐一郎は、とりわけ明治時代の坂崎紫蘭⁽⁷⁾(1883:

の足湯などがある。また、毎年3月中旬にはウオーキング大会「龍馬ハネムーンウォーク in 霧島」を開催するなど、龍馬の来訪を“新婚旅行=ハネムーン”と解釈して観光振興に活用している。

(6) 文久2(1862)年12月、幕府政事総裁職の松平春嶽が書いた紹介状を受けた龍馬は、当時幕府軍艦奉行並の勝海舟の屋敷を訪れ門人となった。姉・乙女へ宛てた文久3(1863)年3月の書簡では「今にてハ日本第一の人物勝麟太郎という人にでしになり、日々兼而思付所をせいといたしおり申候」、同年5月には、「此頃は天下無二の軍学者勝麟太郎という大先生に門人となり、ことの外かはいがられ候て、先きやくぶんのようなものになり候」と、心酔し、喜んでいる様子を書き送っている。龍馬の訪問に先立つ万延元(1860)年、幕府は日米修好通商条約の批准書交換のため遣米使節を派遣した。この時、護衛という名目で軍艦を出すこととなり咸臨丸がサンフランシスコに差し向けられ、同船の教授方頭取として勝は渡米している。司馬は『竜馬がゆく』の中で、龍馬は新婚旅行という習俗を勝から聞いたと書いているが何を根拠にしたものかは不明である。司馬は、渡米経験があり、幕臣内で海外事情に明るいとされた勝が、その門弟として側にいる龍馬に「新婚旅行」を教えた、と考えたのだろうか。

(7) 坂崎紫蘭は1853(嘉永6)年、藩主従医坂崎耕芸の次男として江戸鍛冶屋橋の土佐藩邸で生まれた。1856(安

明治16)『汗血千里の駒』, 大正時代の岩崎鏡川(1926:大正15)『坂本龍馬関係文書』, 昭和時代の平尾道雄(1929:昭和4)『海援隊始末』の3著の学恩と資料のお陰で刊行できたこと述べる(宮地,2003:7)。そこで, 全集編述者が引き合いに出すこれらに記された龍馬とお龍の霧島旅行に関する記述を通読し, 「この風俗の日本での皮切り」を追ってみた。

まず昭和時代の『海援隊始末』では, お龍が(寺田屋の)正月13日の危難で敏捷に立ち回ったために命が助かったと家へ宛てた書簡で吐露していること, 薩摩藩邸まで引き添うて看護につとめたこと, そして妻として小松帯刀や西郷隆盛に紹介したことを順に綴る。その後, 2月末に京都を発ち, 瀬戸内海を通り鹿児島入りし, 日当山温泉や塩浸温泉に遊び, ピストルで小鳥を撃ち, 霧島登山をして逆鉾を抜いて2人は大笑いしたことを記す。このように, 前項でも引用した乙女宛書簡をなぞり書き進み, 「二人にとって, 此の鹿児島滞在が最も楽しい時代であった」と結ぶ(平尾,1929:164-165)。次に大正時代に書かれた『坂本龍馬関係文書』はその一巻目である『坂本龍馬関係文書第一』に, 「(慶応二年)一同年十二月四日(龍馬ヨリ姉乙女へ)」として書簡を全文掲載するが, ここには新婚旅行の文字は見当たらない(岩崎, 1926:233-239)。別冊の『坂本龍馬関係文書第二』には「坂本龍馬手帳摘要」が収められている(1-14)。龍馬が使っていた手帳は, 遺族の坂本直氏が蔵していたものを岩崎が借用し, 「心覺へニ止マル略記草々の揮毫ニテ字体モ難辨」の中から引用し写したものである。別巻 慶應二年三月に「十日 鹿児島府ニ至ル, 十六日 大隅霧島山ノ方ニ行鹿児島ノ東北七里計ノ地濱ノ市ニ至ル 但シ以舟ス夫ヨリ日高山ニ至ル, 十七日 シラヒタシ温泉ニ至ル …(略)」と手帳に記述があり, 一言ずつであるも前出書簡と同じ日々の足跡が理解できるが, こちらも旅に出たことのみ表現で新婚旅行の文字は見えない。

最後に取り挙げる『汗血千里の駒』は, 1880(明治13)年に高知で創刊した『土陽新聞』⁽⁸⁾に, 1883(明治16)年1月24日から同年9月27日まで断続的に掲載された歴史・時代小説である。第卅六回, 第卅七回が鹿児島行の話に該当し, これも姉乙女に送った書簡を下敷きに, 霧島山の描写を前出『西遊記』に負いながら書いた内容である。他書に認められない独特な表現は, 高千穂峰登山をお龍と書生がしたとする点であった。しかし, 同作品には刮目に値する記述がある。それは, 第卅六回の前半部分の「自と彼の西洋人が新婚の時には『ホネー, ムーン』と呼びなして花婿花嫁互ひに手に手を取りて伊太利等の山水に逍遙するに叶ひたりとや謂わん」である。宮地が龍馬研究で重要と示した3著のうち, 最も古い明治時代の作品『汗血千里の駒』に, この旅行が「ホネームーン(ハネムーン)」であると綴られる。この小説は龍馬を題材にした初めての読み物で, 明治前半期に土佐の高知の小新聞にハネムーンとの文字を見つけ大変驚いた。ようやくここで, 龍馬とお龍の霧島行をハネムーンとする表現を見つけられた。

江戸時代の後期には, 善光寺参りやお伊勢参り, あるいは金毘羅参りなどの寺社参詣の

政3)年に一家は高知に移るが, 1873(明治6)年に上京して政治活動に力を入れた。その後, 1880(明治13)年7月に創刊の第二次『土陽新聞』の編集長に就任し, 故郷高知で政治的色彩の濃く表れた言論活動を開始した。当時, 自由民権運動が活発であった高知において, 幕末維新時の土佐藩の状況あるいは土佐勤王党の活動とを重ね合わせながら幾編かの新聞連載小説を発表している。

(8) 第一次『土陽新聞』は政党的パンフレットであった『海南新誌』, 『土陽雜誌』が合併して1878(明治11)年に創刊されたが同年中に廃刊した。第二次『土陽新聞』は, 明治政府の言論統制によりしばしば発行停止処分を受けた『高知新聞』の身替り紙の小新聞として1879(明治12)年に創刊した。1883年に『汗血千里の駒』が連載されたのはこの第二次『土陽新聞』である。

旅が庶民の間でも行われるようになっていた。したがって、龍馬とお龍以前に、結婚直後の新婚夫婦が旅した事例の有無は判別できない。つまり、本章で議論してきた、2人の霧島行きをして「この風俗の日本での皮切り」とは断言できないのである。司馬は、この紫蘭の記述にヒントを得、それを現代風に「新婚旅行」と直し、しかもそれが皮切りだったと書いたのではないだろうか。ピストルを懐に抱き、革靴を履いて歩いた、換言すると西洋文化に対して進取の気性に富んだ龍馬であればこそ、わが国最初の新婚旅行に出たという説にも納得してしまいそうになる。

前出の平尾はその緒言で「坂本龍馬は、明治維新史の奇跡的存在であります。思量すべからざる自由な発想、端倪すべからざる奔放な活躍、雲の如く英雄児の輩出した時代に、龍馬ほど華麗で、深刻で、陰惨で、偉大な事業を残したものが、他に幾人あったでせう。尊攘志士としての彼、立憲論者としての彼、海運事業者としての彼、一剣客としての彼、而して鮮血と情史とを以て飾られた彼の生涯の、なんと多角的であることよ」と語る。他方、岩崎は巻頭序文に「坂本先生の一生は、波瀾重畳、舟筏を僦うて急難を降るが如く、奇観変幻、人をして応接に遑(いとま)あらざらしめ、即ち作為せずして一部の小説であります」と書いている。このように評される疾風怒濤の坂本龍馬が、倒幕に奔走しつつハネムーンにも行っていたというのは頗るおもしろい。しかし本稿では、龍馬がその旅行を新婚旅行であると認識していたこと、またそれがわが国初であったとの証明は残念ながら困難である、との結論である。

4. 近代の新婚旅行攷

4.1 新婚旅行の訳出：明治時代①

これまで、本論攷を誘起した2点について述べた。これらを踏まえ、わが国近代の新婚旅行の変遷を俯瞰していこう。ヴィクトリア朝期(1837-1901)のイギリスは、結婚式がより贅沢なものとなった時代である。すなわち、白いウエディングドレスとベールがミドル層の結婚式に定着し、結婚式、結婚披露宴をしてハネムーンに出かける。それらが確立したのが19世紀末のイギリスであった(坂井,1997:1)。しかも19世紀初めは、結婚式後の旅行を「結婚旅行」⁽⁹⁾と呼び、新郎か新婦の姉妹、母親やいとこを伴い、結婚式に参列できなかった親戚を訪問する、披露宴の延長のようなものであった。その後、19世紀半ばに鉄道網の基礎が整うあたりから、2人だけでかなり遠くまで出かける新婚旅行⁽¹⁰⁾をするようになっていった(坂井,1997:172-174)。ちょうどその頃に、極東の島国が鎖国を解き開国へ舵を切る。そして同時期に、新婚旅行という習俗がヨーロッパから輸入されるのであった。

ところで、わが国でハネムーンという言葉がマスコミに載るようになったのはいつ頃だろうか。前述の『汗血千里の駒』の校注者・林原は、作品内にある「ホネームーン」という語を「honey moon.新婚旅行,新婚の蜜月。満月を愛情の絶頂に喩えた言い方」と説明している。その上でさらに詳しく、これを「歓娛月」と訳出し、その語を明治時代の訳書『花柳

(9) 「結婚旅行」は“bridal tour”, “wedding-trip”, “honey-moon”などさまざまに表記されていた。

(10) 1843年にパリ-ルーアン間の鉄道が敷設されると、ロンドン-パリ間は最短で20時間45分で行けるようになった。それまで費用がかさむとともに時間のかかった大陸旅行が大衆化するのと同じくして、遠出の新婚旅行も広まっていった(坂井,1997:174)。

春話『欧州奇事』附録第十章から引用して「訳者云ク英国ノ風俗夫婦婚礼終テ或ハ外国又ハ他所ニ往キ一二月ヲ歓娛ノ中ニ送ルヲ以テ例ト為ス。之ヲ名ヅケテ(ホネームウン)ト云フ」と補説している(丹羽, 1879: 63)。われわれが渉獵した範囲では、1879年版行の訳書『花柳春話 欧州奇事』が、わが国で最も古い「ハネムーン」という語の使用である。

一方で、ハネムーンを「新婚旅行」と訳述したのは、1889(明治22)年の『東京日日新聞』とされる。哲学館(後の東洋大学)を設立した哲学者井上円了が、欧米の習俗としてハネムーンを紹介し、掲載した『東京日日新聞』が初めてこれを「新婚旅行」として表記したこと由来する(山本, 1995: 129)。その後、1898(明治31)年には『東京朝日新聞』に半井桃水の『新婚旅行』が連載されるなど、結婚式後に行われる新婚夫婦の旅行を表す語として、ハネムーンと新訳の「新婚旅行」が用いられるようになっていく。また専門誌として1902(明治35)年に創刊した『旅』誌に初めて「新婚旅行」の文字が読めるのは、1903(明治36)年の挿絵である(図3)。新婚旅行とはまったく関係のない、「旅行と肺病」という題の記事の中に、和装の新婚夫婦の睦まじい様子と荷物を抱えたポーターの姿がハートの囲みとともに掲載された(54)。記事中に、「新婚旅行は肺病になりやすい」とか「肺病の人は新婚旅行に行かない方がよい」などの説明はなく、なぜこの挿絵に選ばれたのか不可解であるが、とにかくこれが最初であった。

図3 『旅』に初めて掲載された“新婚旅行”の文字



出展：『旅』第13号(1903)

4.2 新婚旅行の紹介：明治時代②

以上までの論放を通じて、ハネムーンや新婚旅行という語が敷衍し始めたのは明治時代ということとなるが、観光行動としての新婚旅行の拡がりはどうした状況であったのだろうか。「婚禮に關する事は兎毫の微も洩さず悉く之を本書に錯綜し得たる」(鵜飼,1894:1)と作者が述べる、明治中期発行の『日本婚禮大全』(1894:明治27)の「第十五章 婚姻前後の禮式 第五嫁實家へ赴く事 歐米諸邦に於ては結婚の禮を舉たる後ち新夫新婦は旅行すること」に、わが国の里帰りに似たものとして新婚旅行を著述している。その項では、新郎新婦が互いに手を携えて羈旅に上り、幽翠閑雅の地で温泉に浸かり「身體を營養する」か、山水の佳觀を探問して「精神を慰め娛しましむること」は「最も新夫婦の情交を緻密にする爲めに宜しき事と謂うべし」と肯定的に書いている(126)。しかし、ここでは「ハネムーン」、「新婚旅行」の語は用いられておらず、大衆はもちろん、この手のハウツー本を金科玉条とする一定程度の上流階級層にも結婚風俗として浸透していない時代と推察される。雑誌『旅』⁽¹¹⁾の第17巻1号(1940年:昭和15)と第23巻11号(1949:昭和24)で、各界著名人の「新婚旅行」アンケートを取り挙げている。明治時代以前に生まれた人は「行かなかつた」との回答が多い。「行かなかつた」と答えたのは、尾崎行雄(1858生/政治家/結婚:1878:明治11「私の時代には新婚旅行などと云うことはありませんでした」)、安部磯雄(1865生/キリスト教系社会主義者・早稲田大学野球部創設者/結婚:1895:明治28「私が結婚したのは明治廿八年でありまして、私共夫婦は全くの貧乏で新婚旅行などといふ氣のきいたことは夢にも考えなかつた」)、土岐善磨(1885生/歌人/「貧乏な新聞記者でしたから新婚旅行などしませんでした」)、山川菊栄(1890生/婦人問題研究家/「新婚旅行など思いもよらないことでした」)、西条八十(1892生/評論家/「当時はそんな余裕もない生活でした」)、子母沢寛(1892生/作家/「廿幾年前ひどい貧乏で、新婚旅行どころではありませんでした」)、菊田一夫(1908生/劇作家/「忙しくて何処へも行きませんでした」)などである。一方、僅かながら「行きました」と回答した人もいる。野村胡堂(1882生/小説家/「鎌倉、江の島」)、井上友一郎(1908生/作家/「湯河原」)達である(1940:50-51, 1949:57-59)。また、このアンケートではないが、尾崎紅葉は1891(明治24)年3月に新妻と江の島の金亀楼を訪れ、「落椿妻に笹折る山路かな」と句を残している(江見,1927:171)。さらに夏目漱石は1896(明治29)年9月、赴任先の熊本から福岡県内を巡遊している。漱石自身は「九州地方汽車旅行」と呼んだが、妻・鏡子と新婚3か月で出た旅であることから、実質的には新婚旅行といえるだろう(小宮,2015:16,30)。こうした資料から、明治生まれあるいはそれ以前に生まれた人々の多くは新婚旅行らしき旅に出ていないようで、ゆとりのある夫婦でもそれほど遠くへは行っていないことが示唆される。

4.3 新婚旅行の普及：大正時代

明治時代には新聞あるいは雑誌などの記事に新婚旅行を取り挙げる例はほとんど無かつたが、大正時代になるとそうした状況が変化し散見されるようになる。

1917(大正6)年3月、大衆層の主婦向けに生活の知恵を授け、生活に根ざした教養と修養の生活技術啓蒙を編集方針に掲げて『主婦之友』が創刊する。新婚旅行は創刊3年目の第

(11) 前出『旅』とは直接の関係はない。前出『旅』は報知社が発行で1902年に創刊し1904年には廃刊している。後者の『旅』は1924年に日本旅行文化協会(後の日本交通公社)が機関紙として刊行した。

3巻第10号(1919:大正8)に「◇新婚旅行の楽しき思出」(102-110)として初めて掲載された。3名の読者の寄稿で、「(一)伊勢神宮から二見浦への旅」(ペンネーム・撫子),「(二)静かで美しい山の温泉へ」(同・ふたば),「(三)海を越えて異国の旅へ」(同・澄代)であった(図4に挿絵掲載)。1編目は、三重県津市出身の夫とともに、東京から伊勢神宮を参詣する旅行記である。西下するにつれ、すなわち2人で過ごす時間が増えるにつれ、少しずつ打ち解けて行く変化が鮮やかに語られる。伊勢で投宿した二見浦の銘館・二見館の女中達の「きっと新婚のお方やナ」との囁きに「恥しいような、嬉しいような、誇らしいような、一種言いやうもない想いに胸を躍らせた」と、新婚夫婦の初々しさが伝わる筆致で書く。また、名勝・夫婦岩から日の出を拝み、「余りの荘厳、余りの雄大に、何と形容する言葉もない」と感激したと綴る。2編目は2人とも横浜育ちの新婚夫婦が伊豆の吉奈温泉へ行く文章である。「皆様方のホネームーンとは一寸趣を異にした質素なもの」と謙遜しているが、東府屋別館に宿を取っており、しかも「長い廊下を渡り橋を渡った離れの八畳間」で「植込もあれば泉水もあり、山もあれば川もある静かで眺めのよい部屋」ということから、決して質素一遍ではなかったようである。3編目の“大正時代の海外新婚旅行!”は当時としては珍しい、という内容なので解説を省くが、3話とも随分とデラックスな旅との印象であった。費用のかさむ新婚旅行は、この時代はまだ上流階級だけのものであったことを示唆する、そんな内容に感じられた。

図4 「二見浦への旅」(左),「吉奈温泉」(右)の挿絵



出展：『主婦之友』第3巻第10号(1919)

明治から大正期にかけて女子教育の先駆者として活躍した下田歌子が著した礼法書『嫁入文庫 禮法の巻』(1917:大正6)では、「全く西洋風が、日本に移って来たので、其の前は更に聞き及ばぬ事」と指摘し、「男女新婚して一家をなすと言ふ事が、日本は西洋とは其の根本からが相違して居るので」、「当人同士と家の事情によって必ずしも行はずとも可い。のみならず、行はない方が可い場合もありませう」と否定的に論説する。その一方で、「婿入り」や「里入り」と呼ばれる、結婚後の夫婦が揃って新婦の実家を訪問することを「大抵行ふ方が多いようで」、「是はまことに美しき佳例」だと好意的に論ずる(135-136)。さらに、『実業之日本』第30巻第1号(1926:大正15)⁽¹²⁾の「特別附録 結婚生活の医学的新知識」には「◇新婚旅行は可か否か」という文章が掲載された。阿部病院長・医学博士阿部喜市

(12) 本論とは直接関係のない余談ではあるが、同号は発行日が1926年1月1日となっている。当時の同誌は毎月2回、1日と15日に発行しており、大正が終了する1926(大正15)年12月25日の10日前に発行された号となる。

郎によれば、恋愛結婚を基調とする欧米では、新婚旅行中に相互の親しみを増すと同時に、将来の家計や家庭の主義方針に関して意見交換しこれを決定する。しかし日本は「在来の風習による結婚が相当広い範囲行われており、互いに相手の気心も、趣味も、思想も知らない、甚だしきに至っては、容貌すらも殆ど知らない者同士が夫婦とせられることがあるのであるから、新婚旅行に就いては、欧米の風習を唯だ単に模倣することの他に、充分な考慮が廻らされなければならない」とした上で、旅行する場所について「閑静な土地で、附近に名所か旧跡でもあって、新夫婦が見物に出掛ける便のあるような所を選択した方が宜かろうと考える」と、医学的知見が明示的とはいえないが、医師としての注意点を述べている(207-208)。『主婦之友』でも第10巻第7号(1926:大正15)で「○新婚旅行は必要か不必要か」(134-137)を記事にしており、当時増加傾向にあるその実施について熟慮することを促した。以上の記事から理解されるのは、この時代は新婚旅行が一般化する過程であり、行かうかどうかは周囲が慎重に関与して決定されるべきものであった、ということとなる。

4.4 新婚旅行の心得：昭和時代

昭和時代に入り、新婚旅行の取り上げ方にどのような変化が認められるだろうか。結論を先に述べると、この時代から婦人雑誌上で新婚旅行について啓蒙する記事が多くなるのである。『主婦之友』第14巻第2号(1930:昭和5)の「○新婚旅行をする花嫁の心得一切」(51-57)を初めに、第15巻第10号(1931:昭和6)は「◇(第三附録)現代婚禮風俗畫報」内に「▲新婚旅行の心得」(31)、続いて第16巻第4号(1932:昭和7)には「婚禮儀式大畫報」内に「△新婚旅行」(41)と、新婚旅行の意義や行動・服装に関する諸注意を、経験者の座談会や専門家のコメントなどで毎年のように記事として取り扱っている。

たとえば「新婚旅行をする花嫁の心得一切～これだけの注意をすれば幸福な結婚生活ができます～」は、井出病院長の女医竹内茂代が、T子さんからの質問を受けるいわゆる対談形式で新婚旅行の心得を詳説する。新婚旅行は有害無益と反対する伯父がいて心配だ、と語るT子さんに対して、竹内は「新婚旅行を、ただ享樂的にばかり考えていたしたら、時に健康を損ねたりして、一生の不幸の原因となること」もあり得ると述べた後、「僅かに知りあっただけの男女二人が、これから新しく家庭を築いてゆかうとする、第一歩に、まづ周囲の煩雑から遠ざかって、お互に打解けた数日を過ごすのが、目的なのです。これを穿き違えると、少しも意味をなさなくなります」と新婚旅行の意義を論し説く。引き続きT子さんが場所と時期、旅行中の注意を尋ねると、竹内は前者については「普通の物見遊山や視察と、全然異ふのですから、そんなに遠いところへ行ったり、長くする必要もないのです。あまり騒々しくないところで、数日を静かに語り合ふことのできる場所が、よろしゅうございますね」と述べ「堅実な生活の基を築く第一歩なのですから、たゞ虚栄や体裁のためになすべきではありません」などと、身分不相応な贅沢や見栄を張ることを諷める。他方時期に関する説明は、医師としての見識も垣間見え、新婦の月経のタイミングと結婚に伴う心身の変化がもたらす不順な来潮に対する助言を与えている。第15巻第10号の「◇(第三附録)現代婚禮風俗畫報」内の「▲新婚旅行の心得」は、日活女優夏川静江と監督村田實をモデルに起用し、綴じ込み見開き4頁に時系列で並べた14枚の写真と文章を用いて解説する斬新な心得である(図5)。これが評判となったのか、半年後の第16巻第4号の第

図5 「新婚旅行の心得」(『主婦之友』第15巻第10号・1931：昭和6)



①旅行…は式場からではなく、時間を都合し、一旦我家に帰ってから出発の方がよろしいでしょう。新婚旅行は新しい家庭を築く第一歩ですから楽しい中にも有意義に過ごしたいものです。

②両親…をはじめ家族の人々に見送られて出発。愉快な旅をするために、なるべく軽装で出かけることが大切—旅行に荷物は禁物です。

③駅まで…お見送りくださったお媒酌人に、丁寧にお礼を申し上げます。嬉しさのあまり、ろくにご挨拶もしなかった、などといふ失敗のないように。



④お嫁…さんは、これまで異性に対したときの警戒網はお除りください。といてあまり狎れなれしいのも見苦しいものですから、親しき中にも、礼儀をお忘れなく—

⑤汽車中…はお化粧崩れにも注意が必要です。お嫁さんの顔が油煙で黒くなつては大変—洗面所へ行くか、もし立てなければ傍を向いて目立たぬやうにお直しなさい。良人の前で大げらにコンパクトを使ふことは慎みたいもの。

⑥良人…を信じきった新妻の朗らかなほほ笑み…良人はまたやさしく語りかけ、心身共に大きな変化をうけた妻をいたわること。



⑦宿に…着いて、いかに女中の手があっても、新妻よ、旦那様のお世話は自分でしてください。早く親しくなるばかりでなく、良人はそれを望みますから…

⑧静かな…山の宿で、晴れ渡った秋空を眺めながら、楽しく語ることもよいでせう。しかしいかに寛いだ折でも、お嫁さんはきちんとした身嗜みでありたいもの。細帯などのだらしない恰好が、やがて愛想づかしのもととなるのです。

⑨旅先…からは必ず両方の親達に便りを出すこと。絵はがきの端に書かれた—二行の音づれから、親は我子の幸福な姿を描き出して、どんなに喜んでくれるかわかりません。

⑩妻は…床につく前に、時計や金入などを目立たぬところにしまつて、部屋の中を片づけておきませう。着物などもきちんと畳み、萬一夜中にどんなことがあっても、まごつかぬやうに…



⑪朝…は夫の起きない先にさっぱりと身じまひをして、かりにも寝乱れたやうすを良人にみせないこと。自分の支度のために良人を待たせるやうなことが、もしあつては大変。

⑫お目覚め…になったら、お着換えや洗面のお手伝ひ—始終晴れやかに、にこにことして…

⑬無理な…行程をとって見物などするより、静かに二人で語り合ふ機会を多くすること。旅行地もあらかじめさうしたところを選びたいものです。

⑭一生…の思ひ出となるやうに、楽しい印象を残すこと。しかし旅行はどんなに長くとも、一週間以内に帰宅することが、すべての結果がよろしいやうです。

図6 第二附録「婚禮儀式大畫報」目次

見合	結婚中の交際	結納	お買ひ物	お母様の教訓	お祖母の参り	花婿の準備	新妻の居間	母の記念品	式服の用意	当日の支度	お化粧	お着附	お花嫁の結方	花嫁の盛装	別れの挨拶	お出まし	花婿の支度	紋着の着附	自動車	玉串の捧ぐ	神前の結婚式	教会の結婚式	家庭の結婚式	三々九度	記念撮影	千代の影	日本風の着席	中正座して	洋風の披露會	色直しの紹介	媒人の祝辭	お見送り	新家庭	夫婦旅行	語りのお世話	良人の世話	お便り	お里送り	お結婚通知	お結婚	洋装の披露會	色直しの紹介	媒人の祝辭	お見送り	新家庭	夫婦旅行	語りのお世話	良人の世話	お便り	お里送り	お結婚通知	お結婚																																													
(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	(八)	(九)	(一〇)	(一一)	(一二)	(一三)	(一四)	(一五)	(一六)	(一七)	(一八)	(一九)	(二〇)	(二一)	(二二)	(二三)	(二四)	(二五)	(二六)	(二七)	(二八)	(二九)	(三〇)	(三一)	(三二)	(三三)	(三四)	(三五)	(三六)	(三七)	(三八)	(三九)	(四〇)	(四一)	(四二)	(四三)	(四四)	(四五)	(四六)	(四七)	(四八)	(四九)	(五〇)	(五一)	(五二)	(五三)	(五四)	(五五)	(五六)	(五七)	(五八)	(五九)	(六〇)	(六一)	(六二)	(六三)	(六四)	(六五)	(六六)	(六七)	(六八)	(六九)	(七〇)	(七一)	(七二)	(七三)	(七四)	(七五)	(七六)	(七七)	(七八)	(七九)	(八〇)	(八一)	(八二)	(八三)	(八四)	(八五)	(八六)	(八七)	(八八)	(八九)	(九〇)	(九一)	(九二)	(九三)	(九四)	(九五)	(九六)	(九七)	(九八)	(九九)	(一〇〇)

第二附録目次 婚禮儀式大畫報 (着色二十四頁) 田中絹代

人局 滿蒙獨立國と上海事件
 那様にお小遣を貰ふ秘訣十ヶ條
 無き婦人が子寶を得る秘訣
 戦死軍人の未亡人の告白

徳富猪一郎 (著)
 寒名氏 (著)
 某氏 (著)
 影善 (著)
 緒方祐 (著)
 柏原長弘 (著)
 森田幸門 (著)
 余田忠吾 (著)

出展：『主婦之友』第16巻第4号（1932）

二附録「婚禮儀式大畫報」内でも「新婚旅行」を再び取り挙げた。図6に読めるように、この附録は「見合」、「婚約中の交際」、「結納」といった挙式前の諸準備に始まり、「神前の結婚式」、「教会の結婚式」、「家庭の結婚式」などの戦前のわが国で一般的であった3種の結婚式の方法、「新家庭」のあるべき姿や式後の「結婚通知」に至るまで図説している。しかも、全48ページ中、着色（カラー刷り）が半分の24ページで、モデルは松竹映画の大スターである林長二郎と同看板女優の田中絹代を起用する力作であった⁽¹³⁾。

この時代に降り新婚旅行の普及をうかがわせる資料が確認できるようになった。1936（昭和11）年『旅』で「新婚旅行の恰好な旅行地」が2号連続で記事となる。第13巻9号は、宿に関して団体旅館は隣の部屋で一晩酔客に騒がれて迷惑することがあり、唐紙一重で自室に連なる旅館ではこちらも相手も困るので避けるように助言した後、東京発地のプラン

(13) この附録が発売された1932（昭和7）年に、松竹下加茂所属の林長二郎と同蒲田所属の田中絹代は映画『金色夜叉』で共演している。大人気の2人が演じた貫一・お宮は、多くの劇場で満員札止めの大盛況となった。また、「ミーハー」という語の語源は、若い女性が好きな「みつまめ」のミと「はやしちょうじろう」のハとの説もある。林長二郎は後の長谷川一夫。

を紹介している。具体的に、「伊豆めぐり」(4日間・80円)、「静岡、久能山、蒲郡、伊勢大廟回遊コース」(5日間・110円)、「京都、桃山、奈良、琵琶湖、叡山、和歌浦回遊コース」(8日間・170円)、「那須、東山、猪苗代湖、佐渡周遊コース」(8日間・160円)など、行先・周遊の順序と移動交通手段の発着時刻、概算費用を計7案提示した(128-131)。翌月の第13巻10号は、新婚旅行を「保養でもない、保健でもない、増して山河を抜渉して自然美に陶醉するものでもない。寧ろ祝福された二つの若き心が、感激と感謝の中に結ぶ生活への真摯な誓いを崇厳な大自然の力によって強固なれとするにあるのではなからうか」と、旅を専らとする誌面にふさわしく、各種旅行の特性と比較して説明している。その後、大阪発地に「白浜温泉」(2日間・25円)、「伊勢、二見巡拝」(3日間・50円)、「高松、琴平道後温泉巡り」(4日間・100円)、「別府、阿蘇巡り」(6日間・150円)など6案示している(120-122)。これらは昭和初期の主に鉄道と汽船を利用した提案である。6～8日間の旅行を、現代のような高速度ではなく、シートその他の乗り心地も上質とはいえない交通手段に頼っての長距離移動は、果たして楽しいものであったのかどうか疑わしいようにも思われる。

また当時の婚礼実用書の『故実と新式 日本婚禮式』(1937：昭和12)では「従来は式場から床入へいったものであるが、新夫婦の契りは、旅行先で結ばれることが、やや普通となりつつあります。『不如帰』は武男と浪子の草津への新婚旅行から筆を起こして居ります」と、挙式後の旅行を“やや普通となりつつある”と記述する。しかも徳富蘆花が明治時代に書いた名作『不如帰』まで持ち出して、それが決して珍しいことで無いとダメ押しするように説明している。さらに、前述の『主婦之友』には記述の無かった、「無理な行程をとったりしては^{いたは}ならない、車中は「新夫の方から話をほぐして行かねば」ならない、など新郎の新婦への^{いたは}勧めも忠告し、より具体的な内容であった(尾關,1937：271)。

新婚旅行は、戦前の新聞の記事としても取り扱われた。たとえば、1936(昭和11)年11月16日の読売新聞朝刊に「大安の夜・九十五組 試運転の賑ふ新婚列車」と見出しの付いた記事が載った。この列車は、午後9時15分東京駅を発つ熱海行きに、大安の15日夜は二等車2両を増結して走らせた試運転の「新婚列車」であった。記事によれば、恥らう新婚夫婦を一般客の目に晒さないようにとの、鉄道当局の「親心」による発案ということである。当時の風習にあった花売娘が新婚客に花を売るためにホームを行き来する様子や、新婚夫婦を見送る親達が複雑な思いなども紹介する⁽¹⁴⁾。また、2年後の1938(昭和13)年11月24日の読売新聞朝刊にも「新嘗祭の佳節と大安が重なってこの秋切って」の吉日であった23日の夜に、やはり東京駅午後9時15分発の熱海行き「新婚列車」を報道している。記者は、国策である「生めよ殖やせよ」の後押しを受けて、人生の行路の第一歩を余裕のつく範囲で旅に出ていった、と書く。これら2つの新婚列車の記事は、現代において毎年6月1日に報道されるアユ釣り解禁のような、11月の大安の夜恒例の「定番」記事となっていた可能性も推察される。仮にそれが事実であるならば、それほどまで新婚旅行が広く浸透していたともいえるのではなからうか。

しかし、こうした報道も戦争遂行長期化に伴い変化を見せる。米英との開戦1か月前の

(14) 東京朝日新聞朝刊にも、同日「熱海へ満員行 花嫁急増デー」と見出しの付いた記事が読める。七五三で賑わった第三日曜(15日)は大安も重なり「むすびの神様が悲鳴を挙げ帝国ホテル、東京会館を初め市内大小各会館の全機能を以てしてもなほ式場が不足した程の盛況ぶり」の夜、東京駅発午後9時15分発、熱海行きの列車に同乗した記者の報道である。

1941(昭和16)年11月11日付け読売新聞朝刊では「築け新世帯 まづは先祖に報告 新婚旅行などは後の後」との見出しが付いた、わが国の伝統的な結婚儀礼を最優先すべきとする記事が読める。また、1943(昭和18)年1月21日朝刊には「ここに好模範 神詣での新婚旅行」として、新婚旅行の代替として神社参詣を推奨し、結納には国債を利用すること、式服は持ち合わせとすることを強く推めている。以上から、新婚旅行1つとってのもこうであるように、報道には時局の影響が色濃く滲むことが理解できる。このように戦前の昭和期は、新婚旅行が大衆化する萌芽とそれの退行が短期間に緋い交ぜと表出する時代であった。

5. 結言：論攷結果と課題

現代における新婚旅行の定番は、ハワイやグアムなどの海外アイランドリゾートで、コロンビア調の部屋やバルコニー、あるいはホテルのバーでゆったりした時間を過ごし、しばしばショッピングモールなどを訪ね自身や家族の土産物を探し…、というのが典型的として想像できる。旅行代理店のパンフはいうに及ばず、webサイトで「新婚旅行」を検索しても、この類か、これに“自分らしい”オプションの網羅されたコピーと画が並ぶ。こうした状況は、これからもしばらく続く現象なのであろうか。結婚式やそれに付随する儀礼(典型的なたとえは、結納や仲人の依頼)は既に多様性が進み、その形式や意味合い、する・しないなど大きな変化の渦の中にある。われわれは、新婚旅行もそうしたモノと同様に、価値観とともに変化すると予想している。なぜなら本稿を通じて理解できたことの1つである、現代の新婚旅行に至るまでには、その時代を反映した様々な変遷があった事実を確証したからである。

一方で本稿を著すきっかけに関する結論については、国内有数の観光地でも新婚旅行招致を積極的にPRしていた事実は発見できず、本邦初の新婚旅行といわれる旅を認定するに至らず、論攷に徒労感が漂うと感ぜられる部分があるかもしれない。しかしわれわれは、本稿がわが国の新婚旅行あるいはブライダル文化などの研究に資することが期待できると考えている。だからこそ本論攷をブライダル研究推進のための基礎的な作業の1つと静思して開始したのである。また、これは日本の近代史にとっても、基礎資料としてささやかながら貢献するところがあるとも確信する。ただしかし、このように述べてみても、わが国近代の新婚旅行についてその特徴をどこまで著せたのか、いささか心もとない気分である。よって、われわれの作業が、次の新しい気づきを与える可能性を大いに期待するものである。

たとえば、戦後の新婚旅行の一般大衆化の問題である。それは大正から昭和にかけて繰り返された「意味」や「心得」が、庶民にとっても受容されたこととして定着した結果ではないかという考えと、近年はそれらに価値を見出さなくなったことが影響し“なし婚”同様の“なし旅行”が増加しつつあるのではないか、などのパラダイムシフトの問題となろう。これらについて、本攷を徒や疎かにせず資料渉猟を継続するとともに、問題意識の棚に並べて、いずれ時期を見て詳察したい。

謝辞

この論攷は、JSPS 科研費・基盤C(第16K02081号)の研究助成の成果の一部です。ここに明記して感謝します。

参考文献

- 朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル」
- 阿部喜市郎 (1926)「新婚旅行は可か否か」『實業之日本』第三十卷第一号實業之日本社
- 岩崎鏡川 (1926)『坂本龍馬関係文書第一』『坂本龍馬関係文書第二』(『日本史籍協会叢書 115』1988・復刻再刊) 東京大学出版会
- 岩中淳之他 (1992)『図説 伊勢・志摩の歴史』郷土出版社
- 鶴飼兵太郎 (1894)『日本婚禮大全』(第二版：1896) 聚榮堂
- 江見水蔭 (1927)『硯友社と紅葉』改造社
- 尾關方外 (1937)『故實と新式 日本婚禮式』文祥堂
- 小宮洋 (2015)『漱石の新婚旅行』海鳥社
- 坂井妙子 (1997)『ウエディングドレスはなぜ白いのか』勁草書房
- 坂崎紫蘭 (1883)「汗血千里の駒」『政治小説集一』(2003・校注者：山田俊治, 林原純生) 岩波書店
- 司馬遼太郎 (1972)『司馬遼太郎全集』第五卷 第九回配本 竜馬がゆく三, 文芸春秋
- 下田歌子 (1917)『嫁入文庫 禮法の巻』實業之日本社
- 『主婦之友』(1919：第3巻第10号, 1926：第10巻第7号, 1930：第14巻第2号, 1931：第15巻第10号, 1932：第16巻第4号) 主婦之友社
- 竹内茂代 (1930)「新婚旅行をする花嫁の心得」『主婦之友』第14巻第2号主婦之友社
- 『旅』第13号 (1903) 報知社
- 『旅』(1936-9：第13巻9号, 1936-10：第13巻10号, 1940-1：第17巻1号, 1949-11：第23巻11号) 日本旅行文化協会・日本交通公社
- 平尾道雄 (1929)『坂本龍馬 海援隊始末』萬里閣書房
- 二見町史編纂委員会 (2006)『合併記念 わが町二見』伊勢市二見総合支所
- 宮地佐一郎 (1982)『坂本龍馬全集』増補三訂版全一卷光風社出版
- 森田彰他 (1990)『目で見る 伊勢・志摩の100年』郷土出版社
- 山本鉦太郎 (1995)「新婚旅行変遷史」『旅』第69巻12号日本交通公社
- 読売新聞社「ヨミダス歴史館」
- リットン原著・丹羽純一郎訳 (1879)『花柳春話 欧州奇事』附録第十章 (『明治初期翻訳文学選』1987・復刻再刊) 雄松堂書店
- アニヴェルセル (参照：2017年8月8日) <http://www.anniversaire.co.jp/>
- 霧島市 (参照：2017年8月8日) <https://www.city-kirishima.jp/kirikan/kanko/bunka/shinkonryokochi.html/>
- (2017.8.29受稿, 2017.9.15受理)

〔抄 録〕

そもそも結婚というものは考えれば考えるほど不思議な通過儀礼である。お互いが惹かれ、心底愛し合うとはいえ、それまで全く別の環境、家族の中で生きてきた2人が、ある瞬間を境に共同生活を開始するのである。そして新婚旅行は、その第一歩として、2人が「甘い旅程・演出」のもと、比較的豪華な旅行に発つのであり、生涯の思い出として長く記憶に残るのは当然であろう。

本稿を著したいと考えたきっかけは、①祖父母の新婚旅行写真を発見したこと、②坂本龍馬が妻と向かった鹿児島行が「わが国最初の新婚旅行」である、という性質の異なる2つの、しかし新婚旅行という共通ワードについて気にかかったからである。

本稿は新婚旅行に関わる理論的な考察は次稿に譲り、その前段として資料の博搜を優先させた。この論攷のきっかけに関する結論は、国内有数の観光地でも新婚旅行招致を積極的にPRしていた事実は発見できず、本邦初の新婚旅行といわれる旅を認定するに至らず、論攷に徒労感が漂うと感ぜられる部分があるかもしれない。しかしわれわれは、わが国の新婚旅行あるいはブライダル文化などの研究に資する部分があると考えている。また、雑誌その他の資料渉猟とその整理は日本の近代史にとっても、基礎資料としてささやかながら貢献するところがあるとも確信する。たとえば、戦後の新婚旅行の一般大衆化と現代から未来のそれに、本稿で述べた「意味」や「心得」が変化することによる影響の問題などである。よって、われわれの作業が、次の新しい気づきを与える可能性を大いに期待するものである。